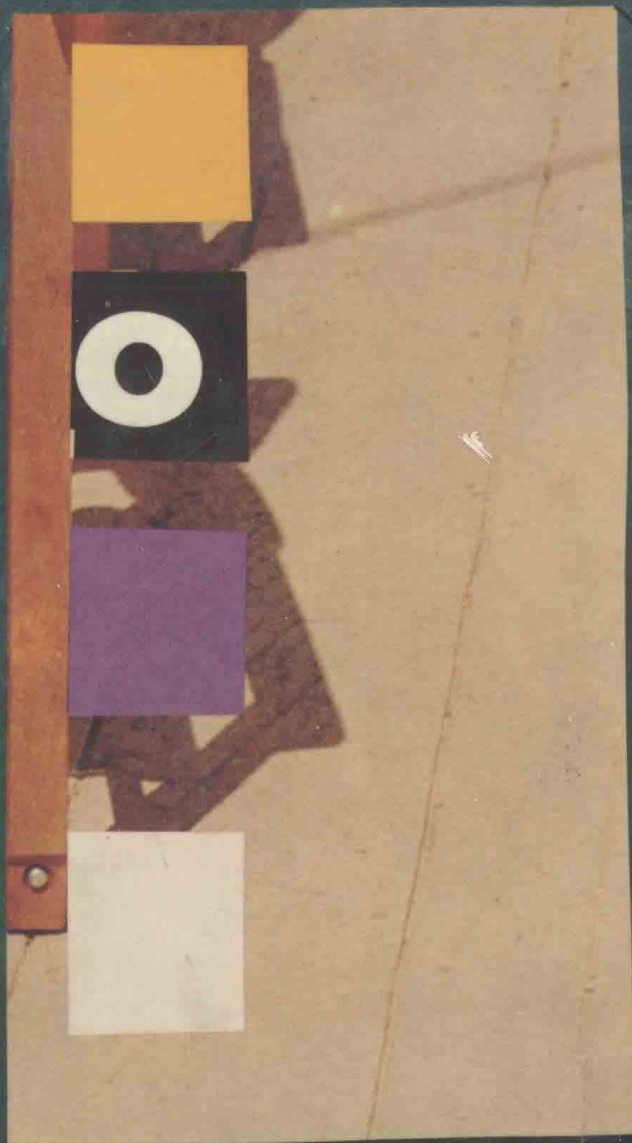


山田太一 沿線地図



沿線地図

山田太一

作品社



沿線地図

一九七九年三月三〇日第一刷発行
一九七九年六月一〇日第七刷発行

定価九八〇円

著者 山田 太一

発行者 寺 田 博

発行所 株式会社 作品社

東京都千代田区飯田橋二ノ七ノ四
下〇三 電話(〇三)二六二九七五三
振替口座 (東京)六二七一八三

印刷・製本 図書印刷

(落・乱丁本はお取替え致します)

沿線地図——目次

ボーイ・ミーツ・ガール	7
父の視点	26
キスをするまで	33
藤森電気店	53
二通の手紙	62
親達とピコン	80
鉄太郎の冬	99
走り去る背中	108
夜の「かもめ」	126
淀橋青果市場	134
天ぶらを食べる	155

傍系人物 164

自由な感じ 167

一杯ずつのコーヒ― 171

二人だけの部屋 189

五月の出来事 196

残された者の休日 219

祖父の来た夜 262

電 話 279

その事だけ書き置く 289

真夜中の灯 296

人工的会合 307

装丁
永田
力

沿線地圖

そこは穴ぐらではなかったが、道子は志郎が穴ぐらにいるように見える、といった。

本当は高校の教室で、高校は学園祭だった。

はじめ「ほらほら」と道子の声があった。

本を読んでいた顔をあげると、ちょっと離れて道子が横顔で立っていた。まだ道子という名前には知らなかったし、はじめて見る顔で、他所の高校生だろうという気はした。十色ぐらいの毛糸をまぜこぜに編んだような大きめのセーターに、だぶだぶのジーンズをはいていた。志郎の学校は、私立の男子高で、学園祭には女子高生があちこちからキッカケをつけに来るのだった。

「ほらほら」というのは、なにかを思い出そうとしているような口調で、志郎は誰か連れにいつているのかと顔をあげたのだが、彼女はひとりだった。

現代美術研究会と書道研究クラブの展示場になっているその教室にいるのは、彼女と志郎だけで、そういう事は少なかった。「あれは暗示的だった」と志郎はあとで何度も思った。書道クラブの二年生がトイレへ行き、込み合ったりすることもある教室に二人だけでいたのだ。外からス

ピーカーの聲が、視聴覚教室で、カール・ドライヤーの映画がはじまるとくりかえしていた。

「ほらほら」と道子は鼻のあまり高くない横顔でいい「ディズニイに眼鏡をかけたオットセイがいるじゃない」と続けた。それから、返事を待つように窓を見ていた。しかしそこは三階で、窓の外に話相手がいるような場所ではなかった。ということは、つまりそっぽを向いているけど、自分に向ってしゃべっているのだと気がつくのに数秒かかり、

「ウォルト・ディズニイ？」と志郎は自信のないような声を出した。

「他にディズニイなんて人いる？」

道子はまだ窓を見ていた。

「アメリカ広いから」

「おたく——マックイーンていうと、ステイプ・マックイーン？　って聞き返すタイプ？」

「意識したことないけど——」

「バートンていったら？」

「アン・バートン？」

「ギャ」と道子は鼻で笑った。「ギャ」ではなく、抑揚もなく「ギャ」と発音するのだ。

「はじめて」

「なにが？」

「バートンていって、リチャード・バートンて思わない男性はじめて」

「好きだから」

「ギヤ」

「デイズニイかどうか分らないけど、眼鏡をかけたオットセイの漫画は見たことあるな」

「穴ぐらにね」道子は笑った。「眼鏡をかけたオットセイがいるみたい」

「なにが？」

「おたく」

いいながら笑って、笑いながらはじめて道子は短く志郎を見、見たのをごまかすように忽ち視線を出口の方へ向け、どこかにギブスでもはめているような後姿でいなくなった。

二日後の夕方、学校のある東京郊外の私鉄の駅から、更に郊外の乗り替え駅まで来て、家のある駅へ行く電車を待っていると、いつの間にか道子が、そっぽを向いて横にいた。某都立高校の制服を着ていて、志郎が気がつくとき「あせった。フフ」と横顔のまま笑った。

制服が似合わなかった。借着のような印象があった。はじめにセーターとジーンズの彼女を見ていたからかもしれない。

駅の外へ出て、ハンバーガースタンドで百円のコーヒーをのんだ。「七本ぐらい電車を行かせちゃったわ」といった。一時間以上待っていたのだった。

「用？」

道子は、その言葉をはね返すように笑った。志郎も慌てて笑って「用って聞くのも気が利かない感じだけど」と大人を気取ったような声になった。

「そういうところがあると思ってたわ」

「どういうところ？」

「用？　なんて聞いちゃうところ」

「うん」

「具体的な用事があるわけじゃないじゃない」

「うん」

では何故待っていたのかというと、つまり志郎と交際したいから待っていたのだと思うけれど、なんだか間違っているんじゃないか、という感じだった。志郎も二つ三つぐらいなら女子高生にもてた体験がないわけではなかったが、それは道子のようなタイプではなく、眼鏡をかけて本ばかり読んでいる自分にふさわしいというような、制服が似合うタイプの女の子なのだった。そのひとりが美女なら恋人同士になったはずだけれど、そういうのはいなかったのでもてた記憶にとどまっているのだが、道子はどちらかというと志郎のようなタイプは鼻もひっかけないという種類の女子高生に思えた。

「オートバイ乗ったことある？」

案の定、そういう質問をして来た。

「ないけど」

「私なんか、しゅっちゅー」

そういえばオートバイに乗ったら似合いそうな顔だった。目尻がちょっとあがっていて鼻が低

いのも「風圧にタフ」という感じだった。

「ディスコは？」

「ディスコ？」

「行くことある？」

「ないけど」

そういう質問は嫌いだった。オートバイは？ ディスコは？ ロックは？ 殴り合いは？ 酒は？ シンナーは？ セックスは？ そしてそのどのひとつも体験していないとなると、なんだか軽蔑すべき存在のように思われてしまうというような価値観には反感があった。

「慣れないのよね」

「なにが？」

「おたくみたいな人としやべるの」

こっちも同じだった。望まないのに場違いなところへ出されて、質問だのなんだのされて「結局ツマンナイ男」だなどと勝手な評価をされるのは迷惑だった。

「ぼくは多分、つき合っても全然ツマンナイ男だと思うよ」

「謙遜しなくてもいいのよ」

「謙遜てわけじゃないけど——」

「何度もこの線で見たわけ。いつもなんか読んでるじゃない。受験勉強かと思ったら、そういう本を読んではいけないのよね。五木寛之を読んではおぼえてるわ」

それはちょっとちがう、といったかった。たしかに五木寛之を読んでいた時があったが、その一事で自分を判断されるのは遺憾だった。自分は他にもいろいろな本を読んでいるし、たとえばボルヘスを読んでいる時を見られたかったと思うが、多分彼女はボルヘスが何者であるかを知らないだろう。

「学園祭があると分って、行ってみたわけよね。相当さがしたのよ。名前知らないでしょ。聞くわけにいけないから、校庭の連中をずーっと見て、一階見て二階見て三階へ行ったらいるじゃない」道子は可笑しそうにして「あそこでも本を読んでいるから、一体どういう人かと思ったわ」と笑い出した。

「すいません」とハンバーガースタンドの制服の女の子が中から出て来て「おそれ入りますが、あまり歩道の方へ出ないようにお願いします。御通行の方の御迷惑になりますから」といった。

志郎はすぐ店とは逆に、車道との境にある駐車メーターの傍へ動いたが、振り向くと道子は動かなかった。

といって、動かないことについて、つっぱったことをいうわけではなく「自分でもよく分らないけど、おたくに魅かれたのよ。つき合いたくしてしようがなくなったわけ」とやや大きな声でいった。その辺にいた人たちが、彼女と志郎を見るのが分った。

「光栄だけど——」志郎は小さい声でいって人々の視線を避けた。「だけど、その」「なに？」と道子は大きな声でいう。

「趣味の問題かも知れないけど、おたくといういい方、好きじゃないんだ」

大きな声を出す彼女にさからいたくて、そんなことをいった。

「なんていわれたい？」

「こっちへ来た方がいいと思うな」

「どうして？」

「どうしてって——」

「どうして？」

彼女は、はじめて志郎を正面から見ていた。目が大きかった。何気ない顔をしているが、やっぱり意地になっているのだった。

「迷惑だよ」

「そんなに通っていないじゃない」

「そういえばそうだが、それでも二、三人は通っていたし、

「わざわざ歩道の真中でのもむことないさ」

「そうかしら？ 私、隅でのんだり食べたりするの嫌いな。きみ、好き？」

「きみ」には、ドキリとしたが、

「好きとか嫌いとかの問題じゃないと思う」

「じゃあ、どんな問題？」

「大体、『私嫌いな』といえ、なにかをしないことの正当な説明が行われたように思うという感じが思い上がりだと思う」

ちょっと議論口調になり、良識を周りの人に聞かせているという感じになった。自分がいやらしいと思った。

「そんないい方をする人とき合ったことないわ」

「だからはじめにぼくはツマンナイ男だといったんだ」

「そうじゃないのよ。そういういい方が好きなのよ。気に入ったのよ。きみのこと好きになったわけが分って来たような気がする」

これを、歩道の真中に立って、二メートル半ぐらいはなれて立っている志郎の方へ、大声でいうのだ。

「大きな声でいうことじゃないよ」

「遠慮っぽいのね」

「遠慮の問題じゃないよ」

「どんな問題？」

「感受性の問題だな。好きとか嫌いとかいう個人的な問題を道で大きな声でいえるっていうのは、社会における自分の位置についての甘えがあるし、羞恥心の問題としても、相当荒っぽい神経といわなければならないし」

彼女は笑い出していた。

「可笑しいかな？」

「来て」